

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博士（学術）	氏名	リュ 柳 ナレ 俵
学位授与の要件	学位規則第4条第①・2項該当		
論文題目 植民地軍港都市鎮海における地域社会の形成及び発展			
論文審査担当者			
主査	教授	丸田 孝志	
審査委員	教授	長田 浩彰	
審査委員	教授	市川 浩	
審査委員	名誉教授	勝部 眞人(文学研究科)	
〔論文審査の要旨〕			
<p>柳娜俵の論文は、日露戦争を契機に日本海軍によって建設された朝鮮の軍港都市鎮海を対象に、中心市街地として発展する日本人居住地区の建設における日本人社会の動向と行政による組織化の過程を検討したものである。従来の研究が、主に日本海軍の戦略に基づく軍事面からの都市建設という視点から行われていたのに対し、柳は日本の軍港都市史研究の成果にも学びながら、海軍、総督府と日本人社会との依存・競合・対抗関係のなかで都市が形成され、発展していく状況を確認した。</p> <p>第1章では、軍港都市鎮海の建設過程において、海軍、総督府、日本人社会がどのように関わったのかを明らかにするため、鎮海防備隊司令官の上泉徳弥海軍少将が主導した土地貸下げ事業による都市の開発、同事業の民間団体「鎮海学校組合」への委譲、同組合を中心とした上泉司令官留任の請願運動について分析した。これにより、海軍の戦略の変化に対応する地域社会の動静が実証的に明らかにされた。</p> <p>第2章では、市街地において公共事業遂行の主体となった「鎮海学校組合」に着目して、海軍と地域社会との関係を考察した。建設ブームにより市街地の人口は急増していたが、総督府の地方行政体系が未整備で鎮海の行政的な位置づけが曖昧な状況の下、同組合は海軍を代行して土地貸下げ事業を行い、様々な公共事業を担う実質的な都市の経営主体として成長していった。「鎮海学校組合」の議決機構である学校組合会の構成員は、市街地の有力者として、市街地の他の民間団体「鎮海繁栄会」「鎮海衛生組合」にも大きな影響を行使していた。</p> <p>第3章では、鎮海における有力者のネットワークが、総督府の植民地管理の枠組と繋がっていく過程を、「鎮海繁栄会」と「鎮海衛生組合」の活動に着目して分析した。「鎮海繁栄会」は、上泉司令官の転任後、市街地の繁栄及び実業発展を目的として発足し、鉄道敷設、神社建設、水道料金引下げの請願、海軍の慰労会の組織など様々な領域において活動を展開した。「鎮海衛生組合」は、警察の衛生管理行政を補助して市街地の衛生施設を管掌した。1915年以後、総督府の地方統治体系の整備が進むなか、「鎮海繁栄会」は公的機関でありながら、自治団体としての性格を保持する方法を模索したが、最終的に解散した。そして、「鎮海繁栄会」の中心人物は、総督府による指定面制の施行とともに、植民地政府の下位組織に取り込まれる形で市街地における権力の中心に再登場することとなった。</p>			

第4章では、市街地の医療について検討が行われた。鎮海において海軍医療機関は海軍とその関係者のための医療を提供しており、市街地では私立病院の医師らが日本人居住者に対する医療に携わっていた。これは、軍港という特性に基づいて日本人居住者が海軍に協調して地域の衛生管理に努めた結果と考えられる。総督府による衛生管理に先駆けて、これらの医療体系が備わっていたため、鎮海市街地に官立・公立病院が設立されることはなかった。

柳の論文は、植民地軍港都市における日本人社会の自立的な行動の分析を軸として、都市の形成と発展の過程を実証的に明らかにしたもので、軍港都市史を近代都市史の分析枠組みに結びつけて発展させる貴重な成果を上げている。今後、都市社会史・衛生史の視角から対象地域の特性を長期的に描き出すことで、関連領域の歴史を再構成する成果が期待できる。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（学術）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。